



発行所 新潟市役所
新潟市西通6番町
866
電話 代表(28)1000
編集人 高橋甲子
(新潟市民企画部広報課)
印刷所 (株)旭光社

老人福祉 特集号



老人無料休憩所「阿賀浜荘」で楽焼きを楽しむお年寄りたち

いつまでも おしあわせに

おとしよりのみなさん、お元気ですか。今年も「敬老の日」がめぐってきました。おとしよりを、家族の方々だけでなく、市民みんなが大切にするのは、別にこの日だけであってはならず、毎日毎日がそうなるべきなのではないですか、ともすれば毎日の忙しさにまぎれて忘れてしまう。そんなことがないように、この日にお互いに確かめ合うことにしたいものです。

全国的な現象ですが、わが新潟市でも老年人口が増えつつあります。昭和五十年国勢調査では六十歳以上の方が四万四千人余で、全人口の十％を超えています。四十年では約八％、四十五年約九％でした。昭和六十年には十三％くらいになるだろうと云われています。みんなが長生きしているのですから、おめでたいことです。

しかし、健康で、みんなから大切にされ、またご本人も生きがいをもつことができればいいのですが、必ずしもすべてのおとしよりがそうではありません。老人福祉施策はこの面に力を入れて行われると同時に、「生きる」「ほりあい」がもてるように援助してゆく方向が大切であると考えます。そしてこのことはおとしより本人がするように考え努力することが大前提になります。「ほりあい」をどこに求めるのかは、人によって異なります。老人クラブでも、いままでは以上にこのことについて話し合ってみてください。一人ではやりにくいことも、いっしょになればやり易く、長続きすることもできるでしょう。

私はこれからも、キメ細かく工夫してさらに「老人福祉」充実のために努力をします。それにどうしても市民の方々、とりわけ若い人たちに訴えたいと思います。いま若くとも、人間確実に老いていきます。おとしよりを大切にすることは、他人事でなく、確実に自分のことです。街で、バスの中で、あるいは家庭で、ちよつとだけでもいい、あたたかい気持ちで、言葉をおとしよりに差し上げてくださいます。どんなにかおとしよりはうれしく思い元気を出すことができます。

一方、がんこのあまり、白から家族の相を乱しているおとしよりも一部あると聞きます。おとしよりご自身も、愛されるおとしよりへの努力をしてほしいものです。おとしよりのみなさん、いつまでもおしあわせにお過ごしください。心から祈ります。

新潟市長

川上喜一郎